

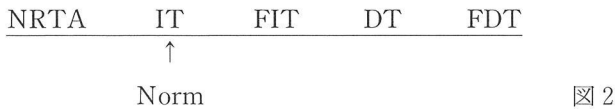
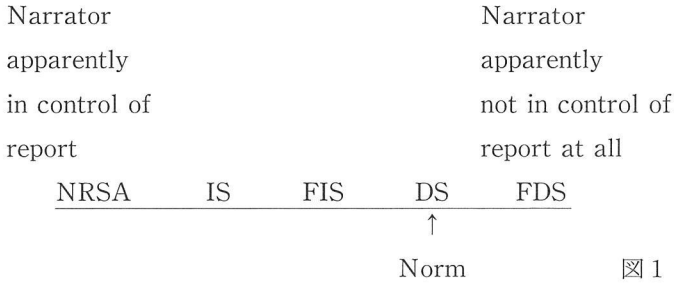
ジェイン・オースティンの文体論的研究

浅 若 裕 彦

Norman Page は、ジェイン・オースティンの小説には、同時代の作家や少し前の時代の作家の作品と共通する要素が多く見られるが、文体的特徴がオースティンを“major novelist”の地位に押し上げている、と述べている¹。本研究では、ジェイン・オースティンの技法的な面での特徴を、自由間接話法及びその他の話法の用い方を中心に考察し、イギリス小説の歴史の中における彼女の位置付けを探っていきたい。そのため彼女と同時代、あるいは近い時代に活躍した作家の作品との比較を行う。比較した作品は、ヘンリー・フィールディングの *Tom Jones*、マライア・エッジワースの *Belinda*、サミュエル・リチャードソンの *Sir Charles Grandison* である。

なお、話法への言及は Geoffrey N. Leech & Michael H. Short の提案した枠組みに従う²。Leech & Short は、登場人物の発話の再現法については、図1のように、語り手のコントロールの強いものから順に、narrative report of speech acts (NRSA), indirect speech (IS), free indirect speech (FIS), direct speech (DS), free direct speech (FDS) の五つのモードを設定し、DS を norm としている。また思考の再現法についても同様に、narrative report of a thought act (NRTA), indirect thought (IT), free indirect thought (FIT), direct thought (DT), free direct thought (FDT) の五つのモードを設定し、IT を norm としている (図2)。

この枠組みは、話法について論じるのに非常に都合のよいものであるが、norm の設定についてはあまり必要性が感じられない。Leech & Short は norm を設定することによって、FIS あるいは FIT の効果を固定化する方向に向かっているが、FIS や FIT の効果は、それぞれの文脈に依存して考えるべきであろう。そのため本研究ではこの norm については考察の枠組みから外すこととする。



I

オースティンは、自分が直接知らない世界のことは書かないという態度をとっており、自分の作品で描く世界の範囲を厳しく限定していた。また、ステレオタイプに陥ることに対する警戒心が強かったようである。彼女は、小説を書いていた姪に、手紙の中で次のような助言を与えている。

Henry Mellish I am afraid will be too much in the common Novel style — a handsome, amiable, unexceptionable Young Man (such as do not much abound in real Life) desperately in Love, & all in vain.³

オースティンが方言や非標準的な発音を表す綴りの使用に対して慎重なのは、このような態度の表れであろう。これは、例えばフィールディングの *Tom Jones* における Squire Western の描写とは対照的である。

[1] ‘Come my lad,’ says Western, ‘d’off thy quoaat and wash thy feace; for att in a devilish pickle, I promise thee. Come, come, wash thyself, and shat go huome with me; and we’l zee to vind thee another quoaat.’ (*Tom*

⁴
Jones, Book V, Ch.12, 202)

エッジワースの *Belinda* では、黒人の使用人の Juba の描写にこのような技法が用いられている。

[2] ‘Ah, *massa*, you no can! Me die, if me go back! Me no can say word more;’
(*Belinda*, 220; my italics)⁵

[3] ‘*Den* me will tell all.’ (*Belinda*, 220; my italics)

ここには非標準的な統語法と語彙 (“I” の代わりに “me”、“master” の代わりに “massa” が用いられている) が見られる。“Den” はおそらく “Then” の意味で、Juba の発音の特徴を示すためにこう綴っているのであろう。

オースティンの作品には、ののしり言葉 (swearword) はほとんど見られないが、*Belinda* には “damme” や “damned” を連発する人物が登場する。

[4] ‘Why *damme*, Clary! you have been a lost man,’ cried sir Philip, ‘ever since you were drowned. *Damme*, why did not you come to dine with us that day, now I recollect it? We were all famously merry — but for your comfort, Clarence, we missed you *cursedly*, and were *damned* sorry you ever took that *damned* unlucky jump into the Serpentine river — *damned* sorry — were not we Rochfort?’ (*Belinda*, 117; my italics)

Norman Page は当時の社会の変化が小説に与えた影響を指摘している。

It is true that, earlier, the eighteenth-century novelists had enjoyed a refreshingly tolerant audience, and their writing is correspondingly frank. . . . by the turn of the century, as the manners of society become more refined and the novel itself seeks a wider audience, frankness becomes markedly inhibited. . . . It is true that some of the Regency

novelists were prepared to show swearing as still normal among gentlemen of the better class: Maria Edgeworth's *Belinda* (1801), for instance, which Jane Austen admired warmly, is much freer in its dialogue than anything in the latter's work.⁶

この点で *Belinda* は、オースティンの作品よりも18世紀の小説に近いと言える。オースティンが18世紀と19世紀の橋渡しの役割を果たしていることが窺える点の一つであるとも言えよう。

II

次に引用符の用い方に注目してみる。オースティンの時代には、まだ現代英語の標準的な使用方法が確立しておらず、注意が必要である。18世紀の小説では、直接話法だけでなく、自由間接話法や間接話法にも引用符が用いられることが珍しくない。また、リチャードソンは、引用の中の引用に限定して引用符を用いる傾向がある。⁷ オースティンの作品にも、引用符のついた FIS はしばしば見られる。

[5] He professed himself extremely anxious about her fair friend — her fair, lovely, amiable friend. “Did she know? — had she heard any thing about her, since their being at Randalls?² — he felt much anxiety — he must confess that the nature of her complaint alarmed him considerably.” (*Emma*, 124)⁸

Norman Page は、オースティンの引用符付き FIS の用い方には一貫性が無いと述べている。⁹ しかし [5] の例のように引用符の付いていないものから付いているものに話法が移行する場合、引用符のついた FIS の方が付いていないものよりも DS に近いものとして用いられているように思われる。他の作家の作品には、このような使い分けは見られない。

エッジワースの作品中の FIS に見られる特徴の一つは、間接話法のように、“he said” や “she said” といったような伝達節や、接続詞の “that” が付いているもの

が多い、ということである。

- [6] His lordship finished his morning visit to Miss Portman, by observing that ‘The house would now be very dull for her; that the office of nurse was ill-suited to so young and beautiful a lady, but that ...’ (*Belinda*, 137)

このタイプの FIS はフィールディングの *Tom Jones* やリチャードソンの *Sir Charles Grandison* にも見られる。ただし、接続詞の “that” は無いものが多い。

- [7] Allworthy answered, ‘That he was sorry for what his nephew had done, but could not consent to punish him, as he acted rather from a generous than unworthy motive.’ (*Tom Jones*, Book IV, Ch. 4, 122)

- [8] Whatever were his motive, Lady Betty said, he did her favour; and she was sure the whole company would think themselves doubly obliged to Miss Byron. (*Sir Charles Grandison*, Letter X, 43)

このように、フィールディングやリチャードソンの作品には、伝達節のついている FIS は珍しくない。しかしオースティンの作品にはまれである。そしてこうした特徴をもつ FIS は、18世紀の小説にはよく見られるが、19世紀以降はあまり用いられなくなっていく。この点でもオースティンは、18世紀から19世紀への橋渡しの役目を果たしていると言えるかもしれない。伝達節を消すことは、自由間接話法を、後の「意識の流れ」と呼ばれる技法に一步近づけることでもあったと考えられる。

III

フィールディングやエッジワースの作品には、発話の再現法を変化させることによって、話している登場人物の感情の高まりや口調の変化を表現していると思われる例が見られる。

[9] ‘You will do about that as you think proper,’ said lady Delacour *haughtily*. ‘Your sense of propriety towards lord Delacour is,’

Belinda, though much hurt by the sarcastic tone in which her ladyship spoke, *mildly* answered, ‘That the promise she had made to stay with her ladyship during her illness was very different from an engagement to assist her in such a scheme as she had now in contemplation.’

Lady Delacour suddenly drew the curtain between her and Belinda, saying, ‘Well, my dear! at all events, I am glad to hear you don’t forget your promise....’ (*Belinda*, 180; my italics)

ここでは、lady Delacour の発話が DS で表されているのに対して、Belinda の発話は FIS で表されている。これは “haughtily” と “mildly” という語で示されている lady Delacour と Belinda の口調の違いを、異なる話法で書き分けることによってさらに強調しているように思われる。

[10] は一人の人物の発話の再現法が途中で変化する例である。

[10] *Jones* gravely answered, “That whatever might be his Fate, he should always lament the having shed the Blood of one of his Fellow-creatures, as one of the highest Misfortunes of the tenderest kind. — O! Mrs. *Miller*, I have lost what I held most dear upon Earth.” (*Tom Jones*, Book XVII, Ch.5, 690)

ここでは Tom の発話が FIS から DS に変化している。Sophia を失ってしまったことに対する Tom の嘆きの言葉が DS となっており、Tom の感情の高まり、あるいは口調の変化を表現しているように思われる。

オースティンの作品には、同様の手法でさらに面白い効果をあげている例も見られる。例えばオースティンの *Emma* には、話法の交代によって、その言葉を話している人物ではなく、その言葉を聞いている人物の感情の変化を表現していると思われる例が見られる。

[11] He [Mr. Elton] turned to Mrs. Weston to implore her assistance,

“Would not she give him her support? — would not she add her persuasions to his, to induce Miss Woodhouse not to go to Mrs. Goddard’s till it were certain that Miss Smith’s disorder had no infection? He could not be satisfied without a promise — would not she give him her influence in procuring it?”

“So scrupulous for others,” he continued, “and yet so careless for herself! She wanted me to nurse my cold by staying at home to-day, and yet will not promise to avoid the danger of catching an ulcerated sore throat herself! Is this fair, Mrs. Weston? — Judge between us. Have not I some right to complain? I am sure of your kind support and aid.” (*Emma*, 125)

ここでは Mr. Elton の発話がまず引用符付きの FIS で示され、途中で DS に変化している。DS の部分に現れる感嘆符は、話法の交代が Mr. Elton の感情や口調の高まりを表現していることを示唆しているように思われる。しかし、この小説の視点人物である Emma にこの言葉がどのように聞こえているかということに考えを向けると、別の解釈も可能である。Emma は、自分が目をかけている Harriet Smith という女性に対して Mr. Elton が好意を寄せていると思い込んでいる。しかし実際には Mr. Elton が好意を寄せているのは Emma であり、それを知らない Emma は、Harriet などそっちのけで Emma のことばかり気にかけている Mr. Elton の言葉に驚き、腹を立てている。そのため Emma の視点に立って読むと、ここでの話法の交代は、Emma が苛立ちを募らせていることの表現であるようにも思われるのである。

次の例では、登場人物の間の物理的な距離が話法の交代によって表現されているように思われる。

[12] “Very beautiful, indeed,” replied Emma: and she spoke so kindly, that he gratefully burst out,

“How delighted I am to see you again!...”

The others had been talking of the child, Mrs. Weston giving an account of a little alarm she had been under, the evening before, from

the infant's appearing not quite well. She believed she had been foolish, but.... This was her history; and particularly interesting it was to Mr. Woodhouse, who commended her very much for thinking of sending for Perry, and only regretted she had not done it. "She should always send for Perry, if the child appeared in the slightest degree disordered...."

Frank Churchill caught the name.

"Perry!" said he to Emma, and trying, as he spoke, to catch Miss Fairfax's eye. "My friend Mr. Perry! What are they saying about Mr. Perry?..." (*Emma*, 479)

ここではまず Emma と Frank Churchill の発話が DS で示され、次に Mrs. Weston の発話が FIS で、続いて Mr. Woodhouse の発話が引用符付きの FIS で示され、そして最後に再び Frank の発話が DS で示されている。つまり全体としては、FIS が DS に挟まれる形となっている。DS が使用されている場合には、読者は登場人物の言葉を直接聞くことになるが、FIS の場合には、語り手の介入の分だけ読者と登場人物の言葉との間に距離が生まれる。そのため [12] では、読者は Emma と Frank の言葉を他の人物の言葉よりも近くで聞くような感じになる。言い換えると、発話が DS で示されている Emma と Frank の二人と、他の人物との間の距離を話法の交代によって表現しているように思われる。

IV

最後に思考の再現法について考察する。オースティンは *Emma* や *Persuasion* において、主人公の心理描写に FIT を大いに活用している。

[13] Jealousy of Mr. Elliot! It was the only intelligible motive. Captain Wentworth jealous of her affection! Could she have believed it a week ago — three hours ago! (*Persuasion*, 190)¹¹

この用い方は、それまでの作家とは一線を画しており、その後の作家に影響を与え、「意識の流れ」と呼ばれる技法につながっていったと思われる。

Tom Jones には登場人物の心理を内面から描いている部分は少なく、FIT はほとんど見られない。登場人物の心の中が語られるときには、たいてい IT か NRTA が用いられている。*Belinda* には FIT がいくつか見られる。

[14] ...and Clarence thought, that perhaps her partiality for him might become less exclusive, when she had more opportunities of choice. If her love arose merely from circumstances, with circumstances it would change; if it were only a disease of the imagination, induced by her seclusion from society, it might be cured by mixing with the world; ... (*Belinda*, 395)

オースティンは、エッジワース及び *Belinda* を高く評価していたので、この技法をエッジワースの作品から学んだ可能性はある。しかしオースティンがエッジワースと違うのは、FIT を主人公にほぼ限定して用いていることにより、作品の大部分において主人公の意識を中心に据えて物語を進めていることである。この手法は、*Emma* や *Persuasion* のような、主人公の心理描写に重点を置いた作品の構築には極めて効果的である。

リチャードソンの作品は書簡体形式を用いており、語り手はそれぞれの手紙の書き手である。いわゆる全知の語り手のように他の人物の心の中を自由に覗き込んで表現することはできない。そのため FIT を活用することは困難である。自由間接話法が用いられるのは、語り手が自分、あるいは他の登場人物の言葉を引用するときがほとんどである。

V

オースティンは小説の書き手であっただけではなく、熱心な読者でもあったので、当然先輩作家から多くの技法を学んだはずである。そしてその技法を洗練させ、後の作家に新たな可能性を提示したことは間違いないだろう。Virginia Woolf の作品に見られるような、語り手の語りが登場人物の思考に頻繁に入り

こむ手法は、オースティンの自由間接話法によってその扉が開かれたのではないだろうか。

註

- 1 Norman Page, *The Language of Jane Austen* (Oxford: Basil Blackwell, 1972), p. 188.
- 2 Geoffrey N. Leech and Michael H. Short, *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* (London: Longman, 1986), pp.318-344.
- 3 Jane Austen, *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*, Vol. II, ed. R. W. Chapman (Oxford: Clarendon Press, 1932), p. 403.
- 4 Henry Fielding, *Tom Jones: an Authoritative Text, Contemporary Reactions, Criticism*, ed. Sheridan Baker (New York: W. W. Norton & Company, 1973), p. 202. 以下、この作品からの引用は全てこの版により、ページ数は本文中に示す。
- 5 Maria Edgeworth, *Belinda*, *The World's Classics*, ed. Katharyn J. Kirkpatrick (Oxford: Oxford University Press, 1994), p. 220. 以下、この作品からの引用は全てこの版により、ページ数は本文中に示す。
- 6 Norman Page, *Speech in the English Novel* (2nd ed.; Houndmills: Macmillan, 1988), p. 113.
- 7 Anne Waldron Neumann, "Free indirect discourse in eighteenth-century novel: speakable or unspeakable? The example of *Sir Charles Grandison*", *Language Text and Context: Essays in Stylistics*, ed. Michael Toolan (London: Routledge, 1992), p. 119.
- 8 Jane Austen, *Emma*: Vol. IV of *The Novels of Jane Austen*, ed. R. W. Chapman (3rd ed. 1933; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1987), p. 125. 以下、この作品からの引用は全てこの版により、ページ数は本文中に示す。
- 9 Page, *The Language of Jane Austen*, p. 126.
- 10 Samuel Richardson, *The History of Sir Charles Grandison*, *The World's Classics*, ed. Jocelyn Harris (Oxford: Oxford University Press, 1986), p. 43.
- 11 Jane Austen, *Persuasion*: Vol. V of *The Novels of Jane Austen*, ed. R.W. Chapman (3rd ed. 1933; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1987), p. 190.